

君との明日

比良井 しほり

三月の終わり頃なんて、陽が落ちてしまえば結構寒い。だから上着を着て来いと言ったんだろうけど――卒業式の夜に学校に行くって、普通ありえないよな。

兄貴お下がりのまだ大きめのジャンパーを羽織り、暗い夜道をとぼとぼ学校に向かいながら俺は何度も首を傾げた。高校合格祝いで買ってもらった真新しい腕時計は、九時五十五分を指している。

事の発端は今日の卒業式での出来事だった。式が終わってそのまま校門から出たところで、クラスメイトの女子、園木に呼び止められた。

「今夜十時、上着でも着て校門の前に来て」

「何で？」

即座に俺は切り返していた。

園木は、席が隣になったのがきっかけで一年の後半頃から良く喋るようになった女子だ。しかも何の因果か三年間ずっと同じクラスだった。腐れ縁なんじゃないかって。元気な奴で、知れば知るほど“女の子”と言うよりも“飛び跳ねている小猿”というイメージがしっくりくる。園木とは小学生の様な追いかけっこを何度も繰り広げた。

だからといって俺と園木はそれ以上でも以下でもなく、校外で会ったことなんか一度もない。それなのに、いきなり夜の十時に呼び出しを食らったのにはビックリした。さすがに親も外出を許す時間じゃあない。こっそり抜け出すことが必要となる時間だ。

園木は一瞬間を置いてから、肩をすぼめてボブカットの髪を揺らし「キシシ」と白い歯を見せて笑った。

「卒業記念の肝試し」

普通肝試しは夏だろう。と俺はすかさず突っ込んだけど、

「来なかったらビビリ」

とだけ園木は言って直ぐに他の女子生徒の所へ走り去ってしまった。言い逃げだ。

夜の十時はさすがに遅すぎるだろう。とは、勿論思った。冗談なんだろうとも当然思った。けれども、男として俺は学校に行かねばならないのだ。何があっても行かねばならない。気合いも乗って俺の歩幅はずんずんと大きくなった。

俺と園木の“ビビリ”には特別な意味がある。一言で片づけるなら、“これが出来なかったらビビリ遊び”だ。運動会の集合体操で特定のシーンわざとワンテンポ遅らせて体操するとか、保健室に行き帰ってくるまで“きゅうりが食べたい”としか言っちゃ駄目とか、怖い先生の車に“実はキティちゃん収集家”という紙を貼って来るとか、校長先生の靴箱にこっそり消臭剤を置いてくるとか、くだらなけど恥ずかしくったり見つかると思われたりする事に挑戦するのだ。お互いに提示した条件をクリア出来なかったら、ビビリレッテルを貼られてしまう。ちなみに、出来た場合は「勇気アリ」と相手を誉めたたえるのがこのゲームだ。

つまり、今夜学校に行かなければビビリレッテルが貼られてしまう。卒業最後にビビリレッテルはさすがに寝覚めも悪いと、俺は親の目を盗んで家を抜け出し学校へと向かっているのだ。

学校まで続く裏道にさしかかったところで、園木が来ていなかったらどうしようと俺は突然不安に思いはじめた。

街の明かりで夜もずいぶん明るくなった――なんてのは嘘だと思った。夜はもっともっと明るくすべきだと思う。向こうでぼつり、更に向こうでぼつりとしかない街路灯だけが心の頼りだった。肌寒い空気が夜を一層澄み切らせているような気がした。

これで校門に誰も居なかったらどうしよう。歩幅はどんどん狭くなっていく。駄目だ。こんなんじゃ本当にビビリだ。

「勇気アリ！」

俺は自分を勇気づけて走り出した。大丈夫。走っていればすぐ学校に着く。園木が居なかったら――奴はビビリだ。ビビリって言ってやる。誰に？ 園木に。居ないのに？ 居なかったら明日にでも言う。卒業したのに？ うるさい。

息が上がる。もっと早く。もっと走れ！ 誰も追いつけないくらい早く！ 目の前の角を曲がる。その先は学校の校門が、

校門の前で、チャキチャキピコピコした奴が手をぶんぶん振り回してジャンプしているのが見えた。

園木だ。

走っていた自分が恥ずかしくなってきた、俺はあわてて歩調を緩めた。なんてことないさという雰囲気。近くまで歩いて行くと、園木は夜でも光って見えるような白い歯をニカリと見せて笑った。きっとサンタさんは暗い夜道を照らす白い歯が役に立つと思ったのだろう。それで園木は泣いて喜ぶんだ。とか、俺はくだらないことをぼんやり思った。

「勇気アリ」

園木が俺をたたえた。おうよ。と、俺は手を挙げて応える。

「お前も勇気アリ」

俺が言うと、園木も「おうよ」と手を挙げた。こんな暗い中で一人待っていたなんて、そっちの方が勇気アリだとちょっと思ったけど言わなかった。

「勇気アリのご褒美。コンビニで買ったんだ」

園木はそう言うと、背負っていたナップから小さなペットボトルを取り出して俺によこした。ホットだったのだろうお茶はだいぶんとぬるくなっていた。

「サンキュ。結構一人で待ってたの？」

俺はジャンバーのポケットに突っ込みながら、出来るだけさりげなさを装って訊いた。俺なら一人でどれだけ待てるだろう。正直なところ、三分。いや、五分が限度かな。

「ん？ 五、六分くらいじゃないかな」

訂正。十分は待てる。余裕。俺が一人頷いていると、

「来なかったらどうしようかと思ったよ」

おどけた様な口調で園木が言った。白い歯が光って見える。なんだ。やっぱり園木も恐かったんじゃないか。

「来るに決まってる。俺はビビリじゃないからさ」

俺がニヤリと笑って見せると、園木はふいと首を傾げて視線を上に向けてから肩をすくめてキシシと笑った。

「本編はこれからなのです」

は？ 本編って？ 言おうとするよりも早く、園木は自分の身長以上もある水色をした校門に飛びかかった。

「何してんだ、お前」

「見れば分かるでしょ」

小猿みたいに園木は校門をよじ登り、するりと向こう側へと降り立った。あっという間にチャキチャキのピコピコが校門の向こう側に見える。まるで、水色をした檻の中に居る猿に見えて少し笑えた。

「へいカモン」

三流映画の金髪女優がベッドに誘うみたいに、園木はおどけて指を器用に動かして俺を呼んだ。

「ヤメロよ。気持ち悪い」

ここで逃げ腰を見せたら間違いなくビビリレッテルだ。俺は門にとびついた。一応女なのに何事もなく向こう側へ移動してしまった園木の手前、絶対にへまは出来なかった。男としてのプライドってヤツだ。俺は門の上から細心の注意を払ってから、勢いよく飛び下りた。

「わっ」

降り立った瞬間体勢を崩して倒れそうに、

「ダサっ」

なったところを園木の言葉を受けて俺は必死に足で踏ん張った。夏休みにプール目当てで忍び込んだ時はこんなによたつかなかったのに。園木が綺麗に下りちゃうからいけないんだ。くそう。本当はもっとスタッ！ と決めたかったのに。

「うるっさい」

俺が園木を睨み付けようを見ると、園木はもう俺に背を向けて歩きだしていた。

「お、おい」

カモンと挑発されて入ってしまったのはいいけれども、まさか校舎の中に入るんじゃないだろうなと思った。明かりの全て消えた校舎はどんと目の前に構えていて、暗くて見えない窓の奥は異界に続いているようにも見える。

「何処行くんだよ」

振り返る様子のない園木にもう一度声をかけると、園木はやっとふりかえってニヤリ笑って見せた。

「言わずと知れた」

含みのある顔に、なんとなく察する。やっぱり校舎に入る気なんだ。ひくりと自分の口元が引

きつるのを感じた。くるりと背中を向けてすたすたと歩いていく園木を遠く感じる。やばい。これはきっちりついて行かなくちゃ……。俺は歩調を早めて園木のすぐ隣に並ぶと、さも平然という顔を装って言った。

「校舎なんて、鍵かかってんだろ？ 開け方なんか知ってるのかよ」

知らないだろ？ だから帰ろうぜ？ とまでは言わない。言ったら最後、俺は“ビビリ”だ。

しかし園木は俺の心の内とは裏腹に、白い歯を見せてニカリと笑った。

「心配しないの。そこらへんはちゃんと考えてあるんだから」

自慢げに言われてしまった。くそう。心配なんかしてないのに。

「ならいいけど」

出来る限り素っ気なく答えながら、俺は園木に聞こえないよう小さく溜息を吐いた。神様。俺の靈感が急激に育ったりなんてミラクル起こさないでくださいね。

園木が連れて来た所は、生徒達が普段校舎に入るための場所でもある、靴箱ゾーンの外だった。誰かが消し忘れたのか、それとも敢えて付けたままになっているのかわからないけれども、この世の者が見てはいけない“何か”が出てきそうな薄汚れた蛍光灯の明かりが入口のところについていた。昼間は閉じられている事のない、色はげのした茶色く重々しい鉄の扉が俺達の来訪を拒んでいるように見える。

もう帰ろうよ――

「閉まってるだろ？」

俺はじっとりと汗ばんだ手で、ポケットに入ったペットボトルを握った。生ぬるい温度がなんだかほっとさせる。握り心地も丁度良くて、これで怪しい人間が出てきたら殴ってやろうとか思った。最近物騒だって言うし。凶器になるものを握っているだけで少し安心するものだ。そういえば、缶詰を凶器にして殺人を殴った後中身を食べて凶器を隠すっていう推理小説を読んだことがある。ペットボトルの角はそんなに固くはないけど、ある程度のダメージは多分、きっと与えられるだろうと思う。そう信じたい。

「ここからじゃあないんだ」

園木は言いながら振り向きもせず歩き出した。

「ここ」

と園木が再び足を止めたのは、先ほどの扉をぐるりとまわった反対側だった。グラウンド側の大きな扉とは対照的に校舎裏にあたるこちら側には、何かの倉庫ではないかと思わせるくらいのドアが設置されている。もちろん同じ靴箱ゾーンに続く扉だ。はげた茶色い鉄のドアが月明かりに浮かび上がっていた。

どっちにしても気味は良くない。先ほどの大きな扉がぶっとい眉毛の閻魔様が待つ地獄に続く扉だとするのなら、こちらの扉は子どもをさらって解体しては人肉を売る、肉屋の冷蔵庫に続いていそうな気がする。

「ここだって鍵はかかっているだろ？ こっちの扉が開いてるの見たことないぜ？」

大きな扉の方が開いているのだからそう不自由は無かったし、校舎裏から靴箱に入ろうとする

ことも、靴箱から校舎裏へ出ようとする事もなかなか無いから、意識もしていなかった。

「そこが盲点」

園木は楽しそうに小さく言うと、辺りを確認してからトンとドアに身を寄せた。ぐいぐいと足下が踏ん張って見える。

「誰も居ないよね？」

不意に園木が訊いてきたので、俺は慌てて辺りを見渡した。塀の向こう側にある街路灯の光と、月の明かり。慣れた場所であった筈の知らない一面と、一人じゃなくて良かったという安堵感と。

どうせ忍び込むなら、もっと大人数の方がいいんだ。わいわいがやがや何人かで肝試し。お菓子なんか持ち込んで、怪談話なんかするんだ。それか、夏場のプールだ。暗い夜とむさる様な空気の中、誰も居ない貸し切りの冷たいプールにドボン。冷たくて気持ちよくて楽しい秘密のドキドキで、これなら――まあ、園木と二人でも悪くない。

――馬鹿。

何で園木と二人でプールならいいんだ。そりゃあ、夏場は貸し切りプールってだけで嬉しいし楽しいし、しかも学校の忍び込んだプールとなれば、誰とだって楽しいんだ。二人でっていうのは、ほら、やっぱり忍び込むから大人数だと結構面倒で、だから二人っていうたまたまそういう事を考えただけで、ほら、だって今園木と二人だし、

今、二人だし――。

カチリ。

小さな音が聞こえた。現実に引き戻された俺がまさかと思って園木を見ると、やったぞと満面の笑みを浮かべていた。開けたのか？ どうやって？ こいつ、何でこんな無駄に器用なんだと俺は笑って見せた。きっと苦笑いになってしまっていただろう。

「佐山、懐中電灯持ってきた？」

持ってくるはずもない。校舎に入るだなんて言わなかったじゃないか。園木が重々しい金属音を響かせて開けた扉の向こうは何処までも続く闇に見えた。肉屋の冷蔵庫だ。解体される。でっかい包丁でもって、所々血で汚れたエプロンを付けたガタイのいい男が待ち受けているんだ。

「……グラムいくらなんだろう」

「はあ？」

つい呟いてしまった俺の言葉を聞き逃すこと無く、園木が声を裏返して訊いた。そのくらい予想もしなかった台詞だったのだろう。そりゃあそうだ。俺は慌てて質問に答えた。

「持ってきてるわけないじゃん」

“あ、そっか。言わなかったかあ”と園木は小さく言うと、背中にあるナップから少し小さめの懐中電灯を取り出した。

「これっきゃないから、暗いところははぐれないようにね」

コイツは恐くないのか。そりゃあ、園木がビビっている姿というのはなかなか想像しにくいけどさ。

園木が一步踏み込む後に俺も続いた。コンクリートにすのこが敷かれた中に懐中電灯の真っ直

ぐな明かりが刺さると、砂埃っぽい空気が充満しているのが見えた。やばい。何で園木は学校に入るって言わなかったんだ。それか、懐中電灯がいるって。足下が暗いまま光を求めて園木にすがり歩くのは、本当にやりにくい。それに、俺がすごい格好悪い。

「ちゃんとして来なよ」

園木がこちらを見ずに念を押した。

「分かってる」

俺が答えるのを確認すると、園木はそろそろと先に進みだした。靴箱ゾーンを越えた向こうはもう校舎になっている。その付近まで行けば窓があって月明かりが差し込んでいる。ずっと奥は職員室で、手前の階段を上れば教室がある。明かりも消えていることもあるし、職員室には誰も居ないようだ。宿直室なんて物もきっと何処かにあるのだろうけれども、馴染みが無くて俺は場所を知らないし人の気配もない。

卒業前まで……つい今日まで殆ど毎日通っていたはずの場所が、全く知らない顔を見せているようで、そら恐ろしかった。

靴箱のドアが閉まるといよいよ中は暗くて、廊下の窓から差し込む月明かりと園木の懐中電灯だけが頼りだった。

「ちゃんと来てる？ はぐれないでよ」

また園木が念を押した。

ははぁん。ひょっとして、実は園木もビビってんじゃないのか？ 人にとやかく言っておいてさ。そう思うと俺の中にも余裕が出てきた。でも、“恐いんだろ”とは言わない。園木の事だ。俺がからかいてもしたら、“恐くないってば！ 知らない！”とか言い返し、薄情にも俺を残してそのまま走って行きかねない。そうされたら、俺は本当に困る。

いよいよ靴箱ゾーンを抜けて廊下に辿り着くと、外の明かりで足下が明るくなった。靴を脱いで靴下を汚しながら階段を上がって廊下を歩いて、

「何処へ行くんだよ」

窓からの月明かりに少し落ち着きを取り戻した俺が訊くと、園木はただ“いーからいーから”と先へと進む。なんか知らないうちに用意していた園木トラップとか仕掛けられていたらどうしよう。不安な気持ちは卒業を迎えた三年生達の教室が並ぶ階へあがったところで少し落ち着き、俺と園木が一年間共に過ごした三年C組の前で園木の足が止まるのを見て、どうやらトラップは無さそうだとほっとして、

「おお」

廊下側の窓から覗き込んだ教室は、普段とは全く違った色をしていて、夏場に忍び込んだプールに似た雰囲気をしていた。

薄青い明かりを受けて、並べられた机も椅子も、前に置かれた教卓も“卒業おめでとう”と描かれた黒板も静寂に包まれて、何だか神聖な場所に思えた。

「ここに入ろうと思って」

園木はガタガタと廊下側の窓を開けた。教室の窓が壊れたままになっているので、俺達は難なく教室に入ることが出来た。

板張りの床にある境目を足の裏にぷつりと感じて、こんな感触だったんだなんて思った。運動場側の窓を眺めると、なんとも言えない懐かしさがこみ上げてきた。いつもと違った光の中で、見慣れた箇所を見つけたからかもしれない。

きちんと掃除をされて荷物も全て持ち帰られた空の教室ではあったけれども、壁の小さな落書きが、黒板の隅にある傷が、机の並び具合が、教室そのものが纏っている空気が、まだ、自分の教室なのだと言ってくれている気がした。

「いつから他の生徒が入るんだろう」

俺は言いながら自分の席だった場所に座った。どん真ん中の席で、先生の目に付くからっていう理由でよく文句を言った。

「四月だよ」

当たり前といえば当たり前な事を言って園木は俺の斜め前の机に腰掛けた。そこは園木の席だった。よくふり返っては俺をからかってきて、授業中俺も一緒に注意をされたのを覚えている。友達にひやかされたりして、そんなんじゃないって何度も抗議をした。もうふり向くんじゃないって何度も思ったし、言った事もある。それでも園木は……

「まだ今は、私たちの教室って感じなのよね」

机に座ったまま、椅子の背に足をかけて園木は俺の方を向いた。まだ俺達の教室で、月明かりの差し込んだ二人きりで、寂しそうに膝に軽く顔を埋めてカコンカコンと椅子を動かす園木の仕草が――

何考えてる。そもそも園木は足癖が悪いんだ。ジーンズはいてなかったら、見たくもないパンツが見えてるところだよな。なんだよ。卒業だからって急にしんみりしやがって。調子狂うじゃないか。

俺はポケットからペットボトルを引っ張り出して、ぬるいお茶を喉に流し込んだ。園木の顔が少し気になったけど、そんなの知るか。

「肌寒いよな」

話題をずらしたい。なんてことの無いことを話そう。駄目だ。考えるな。考えるなっただって考える。何で俺はここにいる？ “ビビリ”って言われたくなかった。どうして園木は俺を呼び出した？ 何で急に肝試しなんて――。

カコン。

園木が椅子を動かすのをやめた。園木の顔が見られない。やばい。何だか知らないけどやばい。やばい気がする。どうしよう。俺はどうすればいい？

「だから上着って」

静かな声で園木が言った。一気に汗が噴き出た気がした。二人で肝試し。ある程度二人で、二人きりで行動することは想定できたはずだった。なのに、いざ一緒になるとどうしていいのかわからないなんてすっとぼけるにも程がある。

「佐山」

つんとつつかれて俺は園木を見た。

「ばあ」

目の前に、懐中電灯を顎の下に押しあてて舌を出した園木の間抜け顔が浮かび上がっていた。
——馬鹿だ。すげえ馬鹿。

「ぷっ」

思わず吹き出した。急に緊張が溶けていく。これでこそ園木だ。

「ばっかじゃねえの」

俺は立ち上がると窓の側に駆け寄った。月明かりに照らされた運動場が見える。もう体育の授業で走る事も無いんだなと寂しく感じて、少しだけ胸が痛んだ。

「もう、来なくなるんだな」

卒業式なんかよりずっと名残惜しく感じた。

「そうだね」

ふと近くで園木の声がしてぎょっとした。見ると少し俺から距離をとって、園木も窓の外を覗き込んでいた。

「何よ」

俺の視線に気付いたのか、園木は気まずそうにまるでアヒルみたいに口を尖らした。

何だよと言いたいのはこっちだ。肝試しじゃなかったのかよ。いや、園木は最初本当に肝試し半分懐かしさ半分でこの教室に立ち寄っただけかも知れない。それを俺が勝手にドキドキしてるだけで——ちょっと待て。ドキドキってなんだ。

「いや」

俺はもう一度運動場を眺めた。もう名残惜しいとかそんな事考えていられなかった。ただ少し離れた隣にオンナノコが居て、電気はついて無くて、明かりは月と懐中電灯だけで、二人っきりで、いつももっともっと馬鹿なことばかりするのに、ちょっと静かな雰囲気になってて、呼び出されてて。

俺はジャンバーのポケットに手を突っ込んだ。園木は寒いかな。園木もジャンバーを着ていたけれども、寒いかも知れない。そういう時って、やっぱり俺はジャンバーを貸してやるべきなんだろうか。だって男だし。貸してやるよとか、そんな事言うの？ ダメだ。俺、死にそう。

「ゴメン」

不意に静かな声が聞こえた。俯いた彼女の横顔は短い髪に覆われて見えなかった。

「来ると思わなくて」

——は？ なんだそれ。頭の中に怒りの火種がふっと浮かんだのが分かった。

どういう事だよ。実はからかったっていいのかよ。ビビリとか脅しといて、無理な呼び出しに馬鹿正直に来たんだとか思ってたって——

「よかつ……」

続きを言いかけた園木の声が思わぬ形で震えて途切れた。園木が慌てた様に顔を背けた。ちょっと待て。冗談だろ？ まさか、そんな。

「泣いてんの？」

俺の質問に、少し間をおいて

「な、泣くか馬鹿」

答えた園木の声は明らかに泣いていて、顔をそむけたままだった。やばい。どうしていいか本気で分からない。泣かしたのか？ 俺が泣かしたのか？ 俺、何をした？

ズッと鼻をすする音が聞こえて、俺は何をする事も出来ずに固まった。よくよく考えてみれば、からかうつもりだったとしたって園木はきちんと校門で待ってたんだ。暗い中、たった一人で。

でも、だからって何で泣く？ 確かにさっきちょっとカチンとは来たけど、俺何も言わなかったし。それより先に泣き出したんだし。こういうの、ゴメンとか謝るのか？ だって俺、何もしてないぜ？ 多分。

俺はずるりと窓側を壁にして床に座り込んだ。園木を見上げるとまだ顔を背けたままだった。もう泣きやんできていて、泣いてしまった手前この気まずさをどうすればいいのかと戸惑っているようにも見える。ここは何か関係ない話を振る方がいいのだろうか。

「腹減ったなあ」

俺の言葉に園木は「ん」と短く答えると、机の上に置き放してあるナップサックからコンビニの袋を取り出して俺の目の前に立った。月明かりでも園木の目が潤んでいることが、鼻が赤くなっていることがなんとなく見て取れた。あんまり見ちゃいけないような、でも、園木がこんな顔をするなんて……なんか……。

「サンドイッチある」

園木はぶっきらぼうに言うと、立ったまま袋を俺に突き出した。なんか今、お互いがぎこちない。もっといつもみたいに、自然体にいかなくちゃ。

俺は生唾を飲み込んで覚悟を決めて、あくまでナチュラルを心がけて、ぽんと隣の床を叩いた。

——こっち座れよ。と、言うつもりが喉がからからになって言えなかった。言おうと思ったタイミングに言葉が出て来なくて、先に腕だけが動いていた。そのまま固まった。俺も、園木も。腕が動かさなかった。床を叩いたんだから、「ここ座れよ」的な意味は伝わっているとは思うけど、気まずいだろ！ 園木は床に置かれたままの俺の手を凝視している。イヤならイヤと言ってくれた方がいい。“佐山の隣に座れるかよ”とか、笑い飛ばしてくれてもいい。けど、これはない。頼むから何とか言ってくれ。引っ込みもつかない。

俺の手が溶けるんじゃないかってほど園木が見ていた。

トイレに行きたい。したくないけど、トイレに逃げたい。

時間はまだ動かない。

やばい。ダメ。もう、——もう限界だ。

そう思ったとき、身を翻した園木がちょこんと俺の隣に座った。ほんの少し俺から離れて。よそよそげに微かに俺に背を向けるような形で、

「ん」

コンビニ袋を再び俺に突き出した。

「おお」

間抜けな声を上げて受け取った。中にはサンドイッチが一つ入っている。お腹が空いているわ

けではなかったけれども、とにかく食べようと思った。サンドイッチを食べ終わるまでは、少なくとも“食べる”という動作が出来る。何をすればいいとか、何を話せばいいとか困らないで済むから。これは結構有り難い。

「貰うよ」

一言声をかけると、園木はンと口の中で短く答えた。

「お前は？ どっちにするんだ？」

サンドイッチは二つのセットのものだった。ツナと、タマゴ。

「タマゴ」

俺はタマゴを取り出して園木に差し出した。園木は俺の方を見もしないで、いや、見ようとせずにタマゴを取った。

「俺ツナね」

断ってツナを取る。かぶりついたサンドイッチは味も分からない。好きな具なのに。もくもくとただ頬張った。

全く。何をしているんだか。

急に冷めた俺の頭がぼやいた。上を見ると、月明かりがぼわりと青白く天井を染めていた。浮かび上がる小さな傷や色はげさえも、幻想的に見える様な気がした。

一年間使った教室だけど、天井ってあんまり見たこと無かったよな。毎日通っていたっていうのに。ふと、そんな事を思った。

夜の校舎に入るのは三年間居て初めてだったし、園木とこんな風に二人きりになった事も無かったし、園木とこんな風に何も喋らずにいる事も無かった。それに、園木のこんなに近くに、

「ングッ」

サンドイッチが喉に詰まった。変なこと考えるからだ。

「どうした、佐山？」

驚いて園木が覗き込んだ。うわ。すげえダサイ。でも、苦しい。

俺が胸をどんと叩くと、事を理解したのか“馬鹿だ”とか言いながら園木は俺が机に置き放していたお茶を取って目の前にしゃがみ込んだ。

「ほら、飲みな」

キャップを取って渡してくれて、あまりの苦しさに俺はひったくるようにしてペットボトルを掴むと、荒々しく喉に流し込んだ。口の端から数滴お茶がこぼれて、ぐぐっと固まりが胃に落ちていくのを感じると、

「ふへえー」

安堵の溜息ってこんなだろなって事を思いながら、俺は長い長い息を吐いた。助かった。手の甲で口を拭くと、

「ばーっか」

目の前に楽しそうに笑う園木が居た。薄暗い明かりの中で笑う園木は、けして小猿なんかじゃなくて、大きな目を弓なりに曲げて笑う表情がなんともいえなくて、

園木はふうと伸びをして見せると俺の前に座り込んで俯いた。体操座りの膝に顔を半分埋める

様にしながら、小さな声で、

「今日は呼び出してゴメン」

謝った。

おどけた感じでもなく、本当に反省しているような、それでいて心底恥ずかしそうに。らしくない。いつもの園木じゃ無いみたいで、

「別にいいよ」

照れ臭くなって、俺は素っ気なく答えた。天井を仰いでお茶をチビリとやる。調子が狂う。もっと馬鹿みたいに笑いあって、追いかけてこして、そういう関係だったのに。

「卒業式の日、一緒に過ごしたくて」

「……え？」

消え入りそうな声に、俺は驚いて訊き返した。勿論、言葉はきちんと聞こえていた。でも、その、それって、

園木は顔を半分膝に埋めたまま、“二度と言うもんか”という意志の固そうな瞳を俺に向けていた。心なしか園木の顔が少し赤い気がする。

「だって！」

園木はついに顔をがばりと膝に埋めた。くぐもった声で、色んな事をぐちゃぐちゃと言った。全部をキチンとは聞き取れなかったけれども、“学校に来てもう佐山と会えないのが寂しい”とか、そんな様な事を言ったのだと思う。

そうか。もう学校は中学校じゃないのだし、高校も違ったから——逢えないのか。学校に来れば当たり前のように園木が居て、当たり前のようにからかってきて、当たり前のようにふざけあっていた。これからも、ただ漠然と「当たり前だから続くんだ」なんてどこか思っていた様な気がする。園木とは違う学校に行くっていうのに。

もう、逢えないのか。

それは嫌だな——

「……つき合う？」

自分でも予想しなかった言葉が自然と転がり出た。意識していたら到底言えないセリフだし、むしろ言ってしまうってから俺は恥ずかしくて胃が急激に縮みだした気がした。

「ばっ!？」

園木は勢いよく顔を上げると、身を乗り出すようにして言った。

「あ、あんた、つき合うって、ど、どういう意味か、分かってるの!？」

そんな言われ方をされると逆に意地も張りたくなる。俺はへっと肩をすくめて言った。

「馬鹿にしてんのか？ 一緒に帰ったりデートしたりキスしたり……」

しまった。この状況下でキスの話題はやばかった。暗がりの中でもみるみる園木の顔が赤くなっていくのが分かった。

「ばっかじゃないの!」

理性も飛んだのか、驚くほど大きな声で叫ばれた。

「馬鹿！ 声でかい！」

自分でもしまったと思ったのだろう。俺が言うより先に園木は慌てて口を押さえて廊下を見やった。誰かが巡回している素振りは無かったものの、一応気を付けておきたい。

少しの間息を潜めてみたけれど、廊下は静かなまま。何も起こる気配はなかった。

「あんたが変な事言うから」

俺よりも先に大丈夫だと踏んだ園木が声を潜めて俺を睨み付けた。人のせいにするな。確かにちょっと言ってしまったとは思った。それは認める。でも声をあげたのは自分じゃないかよ。

園木はバツが悪そうに俯いた。少し間を置いた後じろりと俺を見上げて、

「キスって言ったってどうせ、」

そこで園木ははっと慌てて口を閉じた。続きを言われてしまったら、俺だって引き下がれなくなるかもしれない。それは園木も思ったからこそ先を言わなかったのだろう。ギリギリの線でセーフだ。聞こえなかった事にすれば意地を張らずに済む。

早鐘の様に胸が鳴っている。掌に汗がにじんでいるのが分かった。

――したくないって言ったら嘘になる。

駄目だ。何を考えているんだ。そもそも何でこんな事に。

園木は目の前で再び俯いた。

どうすればいいのだろう。戸惑ったまま何も出来ず時が流れていく。沈黙が恐かった。だからといって何か出来るのかという出来ないでいる。止まってしまった流れを再び戻す方法が俺には今思い浮かばない。

園木も何か喋ってくれればいいんだ。待て。それは内容にもよる。一層気まずくなるような事になったら困るし、そもそもこの気まずい空気は挑発しかけた園木のせいじゃないか。まあ、つき合うとか言ったのは俺だけだ。

俺はコツンと頭を壁に預けて天井を仰いだ。暗い天井が、馴染みある教室の匂いが、少しずつ気持ちを落ち着けてくれた。今はまだどこか自分の教室に思えるこの場所も、ここの空気も、いつしか他の生徒達の物になってしまうのだろうな。

――つき合うとか言ったけど、園木は嫌だったのかも。そもそも、つき合うとかって好き同士とかであって……俺は……俺は、よく分からないけど、園木と会えなくなるのはなんだか嫌だなんて思って。園木は？ 園木はどんな気持ちなんだろう？

実は本当に肝試しのつもりで、なのに俺が一人で意識してつき合うとかわけわかんない事言い出して戸惑っているのかも知れない。――だとすると、相当気まずい。

俺はもう天井から視線を外せなくなってしまった。

一緒に過ごしたかったっていうセリフは？ いや、それもそもそも深い意味なんてなくて、単純に仲良く追いかけてこをした相手として卒業を前にふと行ってしまっただけだったとしたら。

死にたい。

穴をほじくり返して入ってしまいたい。

「つき合ったら、また逢えるね」

静かな、小さな声が聞こえた。月夜に溶けて無くなってしまいそうな声だったけれども、俺は聞き逃さなかった。

園木は恥ずかしそうに唇を噛みしめていた。

「うん」

つき合ったら、また逢える。毎日学校で逢える訳ではないけれど、それでも俺と園木は卒業で切られずに繋がってられる。

追いかけてこしながらデートしてもいいかも。そんな事を思った。シャープペンの代わりに何を盗って逃げようか。

園木が嬉しそうに笑った。オンナノコの笑顔だった。

何だか恥ずかしくて俺は頭を掻いて、ふと腕時計に気が付いた。まだぴかぴかしている新品の入学祝い。卒業があるから入学がある。片腕を上げて月明かりにさらすと、かろうじて十一時五十三分だという事が見て取れた。

「あと七分で明日になる」

俺が言うと、園木がもそもそと俺の隣に這って時計を見上げた。シャンプーの香りがして、どうしようかと思う。

「じゃあ、明日につき合おうよ」

いいことを思いついたとばかり園木は目を輝かせた。中学校生活終演の卒業式の翌日につき合う。学校に行けば逢えていた日々が終わるから、

「それ、どう決めるんだよ。この瞬間って」

照れ臭かった。

園木は口をアヒルの様に尖らせる。

「明日きっかりにつき合おうって言うの」

「どっちが」

「先に言った佐山に決まってるじゃん」

「俺が！？ さっきもう言っただろ？ 何でまた言うわけ」

滅茶苦茶照れ臭かった。あれは自分でも驚くほど自然に転がり出た言葉であって、意識したら到底言えるもんじゃない。

園木は真顔でグーを俺に見せた。

「じゃあ、ジャンケン！」

――俺が負けた。

ここ一番の勝負で園木に勝てた試しが無いことをすっかり忘れていた。“じゃあ、ジャンケン”と言った時の園木は強い。ことごとく俺は苦渋を舐めてきたというのに。ちくしょう。

二人で腕時計を見上げた。かろうじて見ることの出来る時計の針は、十一時五十八分を指している。園木の頭が肩に触れていた。このまま倒れてしまいそうで、きっと倒れたら今ばかりは胸ぐら掴んででも起こされそうだななんて事を考えて、

青白い光の射し込む薄暗い教室の中、毛布を肩に掛けて、馴染みの深い空気を肌で感じながら

、十二時きっかりに、

「つき合ってください」

泣いてしまいそうなくらい緊張して震えた声が恥ずかしかった。

「うん。いいよ」

園木も声も震えている気がして、だから、俺はほんの少し安心したんだ。

END

あとがき

この作品は2005年09月頃に私が自分の小説用HPで掲載した作品です。

11年ほど前の作品なのに、文章能力変わってない気がして怖いです。
ほとんど書き直しをしていません。
なので無料配布っていう、ね。

当時はお題配布サイトからお題を拝借して、お題から作品を作るということにハマっていたので、その中の一つです。
なので、当時の題とは変更させていただいております。

この作品は一回書き直して(そして書き直しデータをどこかへやっちゃまったっていう、ね)、ほかの作品とともに短編集的な形で某出版社さんに投稿したのですが
アドバイスをいただきまして、「もっと自分のカラーを出して！ 惜しい」みたいな感じのお話を
させていただけた思い出の作品でもあります。

割と王道なお話ではないかと思います。
王道すぎるというアドバイスをいただいた気がします(^^ ;

今の時代となっては、中学生はもっとマセているところもあるのかもしれないなあなんて、思ったりする瞬間はあるのですが.....
そう。

10年前に書いてますから、当時LINEなんてないわけです。
クラスでからかい合う様な感じなら、今や「LINEやってる？」とかなりそうなんですけど
まだまだそんなものがない時代に書いていたので、、、

また、今では中学校も忍び込めない仕様になっているでしょうしね。

ませた中学生だってきっと居たのだろうけれど
まだまだ幼くて、つき合うとか、好きとかっていや、それ、真面目に考えるとどうということなんだろうね？ なんか、よく分らないよね。
みたいな、そういう初々しい二人を描きたかった。

で、やっぱり女の子のほうが少しおませさんなので、作中実は園木ちゃんの方が主人公のことを意識していたりします。

それでも、彼女はまだまだ幼くて、主人公を呼び出したもののそこで「告白しよう」とかまでは考えていなかったモヨウ。

もう会えなくなったりするのかな？

だって、考えてみたら学校外で会ったりとかしたことないし。

じゃあ、もうアイツと会えるのって最後なのかな？

それって、なんかすごく寂しいし……なんか、悲しくなる……

そんな思考回路から主人公を誘ったわけであって、主人公佐山の「つき合う？」という言葉は彼女にとっても大変に予想外の出来事でした。

ちなみに、佐山くんも全くの予想外。

この日、佐山くんは初めて異様に園木ちゃんを「女の子」として意識します。

この初々しくフレッシュに意識する感じを考えながら描くのって、また個人的にドキドキしたりしてね。

すでに異性を意識している状態で、より異性を感じるシーンとはまた着目点が違う気がするし、男の子の性格もあるだろうしね。

佐山くんは、恋愛にはとても疎い仕様になっています。

「恋愛？ それは食べ物でしょうか？」

くらいのノリで中学三年間生きてきたのでしょうか。

そして、「つき合う」がどういうことなのかも、薄っぺらくしか考えていません。

なので、「一緒に帰る(←同じ学校じゃないから一緒に帰るとかないだろ)」「デートする」「キスする」の、三項目なんでしょう。

一応、敢えて「手をつなぐ」をすっ飛ばして書いてみました。

そもそも思いつかない、的な。

これから二人のお付き合いは大変そうだ。

初デートとかめっちゃ面白そう。

あ、いや……二人のデートが面白いっていうか、描き手として想像すると楽しいなあって。

とりあえず佐山くんが

「やはり俺がデート誘わなくちゃいけないよな！ って、デートってどこ行くんだらう？ 園木に訊いてみる？ いや、誘うのに訊いちゃダメなんじゃないか！？」

とか、お互いの高校が終わった後のちょうど二人の家の間の公園あたりで園木ちゃんとジュース飲みながら、一人で悶々考えるみたいな。

え？ それってある種すでにデートなんじゃねえの？

みたいなことになっていそう。

ちなみに、作者は何度か夜の校舎に忍び込むネタを書いていたりするんですが、忍び込んだことはありません。

リアルを経験されている大人の皆さんからすると

「つき合う」の意味もあいまいな状態で、しかも別々の高校へと進学となると、実際のところは波乱の様相というイメージが.....大人になって心がけがれているのでしょうか、私.....

何はともあれ、こんなロマンチックなおつき合い開始っていうものにどこか憧れるような

リアルでは冷めてしまうのでしたくないような.....

ここまでお読みくださった方。

ありがとうございます。

2016/06/15